支援会議を活性化させる「ファシリテーション」

企画者　三田地 真実（星槎大学大学院教育実践研究科）
司会者　岡村　章司　（兵庫教育大学大学院）・三田地 真実（星槎大学大学院教育実践研究科）
話題提供者　三田地 真実（星槎大学大学院教育実践研究科）
実政　修　（広島県立尾道特別支援学校しまなみ分校）
岡村　章司　（兵庫教育大学大学院）
田熊　立　（千葉県発達障害者支援センター）
縄岡　好晴　（千葉県発達障害者支援センター）
指定討論者　竹林地　毅　（広島大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 特別支援教育　支援会議　ファシリテーション

【企画趣旨】（三田地）障がいのある児童生徒、及び成人を対象とした支援会議では、対象者の教育・支援に関わる関係者が一堂に会して有機的な話合いがもたれることが理想的であるが、実際の現場からは、「声の大きな人の意見ばかりが通る」「全く意見を言わない人がいる」「話がなかなかまとまらない」「話合いの結論が最後に覆される」「決まったことが実行されない」など、話合いの内容（コンテンツ）ではなく、「話合いの進め方そのもの（プロセス）に対する課題」が提起されている。三田地（2007）、三田地（2013）では、このような話合いの進め方を改善する技術として、日本ではビジネスの世界から広がりをみせている「ファシリテーション」を紹介してきた。

本シンポジウムでは、実際に現場でファシリテーションを活用して、具体的にどのような効果が見られたかについて、学校現場のみならず、福祉の現場からの報告も紹介し、支援会議を実りあるものにするためにはどのような工夫が考えられるかについて討議したい。なお、本セッション自体もファシリテーションの技術を駆使して「参加者間の相互作用」を活性化しながら開催する予定である。

【話題提供者の趣旨】

1) ファシリテーションとは何か～いくつかの事例紹介を含めて～（三田地）

「ファシリテーション」とは、「促進する」、「容易にする」という意味の”facilitate”の名詞形で、広義にはワークショップなどを含めた場づくりの技法（中野，2003）、狭義には会議を促進するための技術である。教育現場においても、近年、校内外の関係者との会議を実施する際などに特別支援教育コーディネーターに必要なスキルとして認知されつつある。ファシリテーションの概要を解説すると共に、実際の教員の教育現場での実践のいくつか（コーディネーターとして校内外の会議をどのように活性したかの具体例）について報告する。

2) ケース会議におけるファシリテーションの活用（実政）

5 年前、中学校で特別支援教育コーディネーターをしていた時に、初めてケース会議を開催し、「毎年、全学級でのケース会議開催」「担任・担当者の元気が出るケース会議」を目標に取り組む。最初はうまくいかず、効率的な方法を模索する中、ファシリテーションに出会う。ホワイトボードに発言を記録しながらケース会議を行ってみて、その効果に驚き、以降相談活動や生徒指導にもホワイトボードを使って取り組む。

現在は特別支援学校の特別支援教育コーディネーターとして、地域の学校の巡回相談やケース会議にあたっている。その際、一人一人にミニホワイトボードを配布し、ペアトークやグループ討議、意見回収を行うなど、話し合いをより活性化させるための方法を考えながら実践している。

3) 特別支援学校におけるファシリテーションの活用（岡村）

特別支援学校はチームで支援することが原則である。特に行動問題を示す子どもを支援する場合、教師間で支援内容や方法に関する共通理解を図ることができるか否かは成果に大きく左右する。そのために、子どもの支援の具体が明確になる会議を行う必要がある。教師の子どもの支援について話し合う行動を高めるために、機能分析は欠かせない。アセスメントに基づき会議の場を構造化することで、話し合う行動が強化され、教員各自がチームとして支援することの醍醐味を味わうようになる。しかしながら、現場においては、単にファシリテーションを導入するだけでは会議が必ずしも活性化されるわけではない。教師に対するアセスメントをもとにした、会議を活性化するまでの準備段階での介入も含めて話ができればと考えている。

4) 福祉現場でのファシリテーションの活用（田熊・縄岡）

千葉県では平成 26 年度より、入所支援に従事する 16 名の支援者を対象とした「強度行動障害のある方の支援者に対する研修」を実施している。支援ではアセスメントや記録に基づく PDCA の展開や支援統一など、支援計画の立案・実行の基盤となる支援環境を整えることが重要である。しかし、昼夜のローテーション勤務で支援を行っている入所施設では、会議や引き継ぎに十分な時間をとることができない。受講生へのアンケートでは、この職員間のコミュニケーション不全が、支援環境を揺るがし、支援実行の障壁となっていた。そこで、職員間のコミュニケーション改善を目的としたファシリテーションの連続研修（4 回）を実施した。ファシリテーションを学ぶ前後で、実際の会議がどのように変容したのかを、受講生と会議に参加した施設職員に評価してもらった。その結果を中心に報告する。

【指定討論者の趣旨】（竹林地）

障害のある児童生徒への十分な教育の実現を目指し、学校では、教育課程や授業の工夫（変更）、学校内の同僚性と協働性の向上、関係者・機関との協働が取り組まれている。学校組織の同僚性と協働性の向上は、教師の専門性の向上と教育の創造につながるとの認識から指定討論を行う。

（文献）

・中野民夫（2003）ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝ革命（岩波アクティブ新書）
・三田地真実（2007）特別支援教育 連携づくりファシリテーション（堀公俊監修）（金子書房）
・三田地真実（2013）ファシリテーター行動指南書－意味ある場づくりのために（中野民夫監修）(ナカニシヤ出版)

（MITACHI Mami, OKAMURA Shoji, SANEMASA Osamu, TAKUMA Ritsu, NAWAOKA Kosei, & CHIKURINJI Takeshi）
※連絡先：　m_mitachi@seisa.ac.jp　（三田地）